

トーマス、ギルチン〔下〕

青 人

ギルチンの大傑作暁の光景のブリツヂノースの如き雄健で實に印象單一である。また日没の景、ホワイトハウス・アット・チエルシーの如き畫風單純にして廣濶、ターナーの稱讃して措かざるものである。或る朝一商估の來つてターナーの繪を見て、いふには、『何れも甚だ結構であるが、私はこれ以上の結構なものを持參しました。』『それは何んなものであるか知らんがトーマス、ギルチンのホワイトハウスアットチエルシーの外にはあるまい』とターナーが答へたといふ事である。



鳥村安三郎筆

で、軍隊的の直裁があり、犯すべからざる威嚴がある。圖柄が大きくて、完全して、しかも落付がある、色彩は沈靜であるが低い調子の中に不知不識に引付けらるゝ様な不思議な光輝がある。素より和かな光輝であるが室内全體を靜に照らして居るやうに思はるゝのである。ギルチンの優麗な佳作は眼を接近して見るときは分らぬけれども、一定の距離を隔てゝ見ると、光線や厚さ等が焼點に依りて明に分るのである。ターナーの影響はかゝる點に於ても少しも受けて居らぬ。ターナーの筆は頗る巧妙に艶麗ではあるが、これを以て名玉として賛することは出来ない。その想像の作用や色彩の妖艶なる處は壁間の粧飾には餘り微妙であるといふものもある。

このホワイトハウスの水彩畫は當時ホレーショ、ミコルス氏の所有で、ターナーの水彩畫と相隣して掛つて居る。この室にはデヴィッド・コックス等の水彩畫も掛け連れてあるのである。ギルチンの作畫法はその目的點に直通して、苟も贅筆を用へない。その作品は素より巧妙であるが故ではあるが、常に筆力が雄健

誠にターナーの水彩畫は紙匣中に藏すべき財寶であつて、これを至細に注意し、または日光に晒らして研究すべきものではない。これに反してギルチンの繪は紙匣中に藏すべきものではない、立派に額縁に入れて、光線の良好な處へ掛くべきものである。唯

こゝに注意すべきことがある、それはこの調子の沈靜な、圖柄の大きなギルチンの繪に對して、他の作家の名畫を連れて、技を競いしめることは斷じてすべきことでない。しかし他の水彩畫には、ギルチンの最も優麗な水彩畫に匹敵するものは恐らくあるまい。近代の水彩畫で最明るい調子で精鮮に描いたものでもギルチンの作品の側へ持て行けば、膿臃として汚いものとなるのである。

こゝに少しくギルチンの運筆と畫風の重みを語らう。ギルチンは畫面に向つて筆を遣ふこと自由に快速でしかも一點の誤りをなさない。目と手とが隱約の間に共に感應して働くやうである。氏は好んで、廢寺、廣場、壯嚴なる寺院、肩摩殼擊の市街、荷馬車の馭者の一列、廣野の寒き曉、山間の瀑布、巴里の古昔の光景、質朴なる英國の田園、或は流に沿ふた古家の亂れて並べる處等を描いた。

氏のタツチは活氣があつて加ふるに快速で、意味の含蓄があつて、苟も下した彩筆の一點たりとも決して、そつがない、氏の友人が氏の執筆の様を見て、舞筆の妙宛ら劍舞を見る觀があるといふて居る。こゝに記憶すべきはコツトマン、ターナー、デウイント、アール、ビー、ボーニングトン其他の畫家がギルチンの下に來てこれを見て大いに益する所があつたのは事實である。實に十九世紀の前半朝に大英國水彩畫が隆盛であつたのはこのギルチンを中心として諸名家が起つたからである。猶記憶すべき一事がある。レスリーの著「コンステブル言行録」に

「ギルチンが天才青年畫家等に及ぼした勢力は、水彩畫家のみでなかつた。コンステブル自身も、ギルチンの作品三十餘點を研究して、油繪風景畫の描法の全部の方針を換えた」とある。更に記憶すべきことがある。コンステブルの技術はコロ、ローシユ、ドビニー等の佛國派の直接な先驅である、コンステブルの技術はギルチンを學んで得たるものであるから、頓でこれをギルチンの勢力といふて好いのである。

畫風の重み、これは畫全體からいふと、僅かな性質で、或は批評家が眼中に置かぬものもある。ギルチンは自然を圓きものとして觀察した。氏が作品中には物の輕重を明かに描いてある。例之ば氏が作品クニーセントデニスを見よ。家屋は堅固に、その土臺の上に直立して、眞の建物の如くに厚さが見える。そこに集まれる群集も活潑で生氣がある。

猶多くを言はんでも、ギルチンが英國水彩畫の諸名家中に秀てゝ居つたことは前陳の事柄で分明である。二十七年餘の短生涯に於て、同輩を抜きん出て、堅忍不拔の志を以て創作に従事し忽にして師表と仰かれたのであつた。ターナーがギルチンの事に付て喜んで語つて居つた言に、「トム、ギルチンが生きて居つたならば、私の腮が干上がる」と。

ギルチンの傳記は他日に譲ることとして、こゝには唯ギルチンは佛國人の血統であつたといふ一新事實を記して筆を擱くこととする。

(完)